

中東の新しい 市場創出への期待



公益社団法人 経済同友会 中東委員会 [委員長]
日揮株式会社 [取締役副会長]

川名 浩一

Koichi Kawana



トルコからイラク、イランに跨る^{またが}一帯は、ユーラシアプレートとアラビアプレートのふたつの巨大なプレートが衝突する地帯だ。この地に今、地殻変動が起きている。とはいっても地上での話だ。この先出現するのは新しい秩序か、それとも混乱か。

3億3000万人に及ぶ異なる一神教と多様な宗派の人々が暮らすこの地域では、「シーア派の三日月地帯」からイエメンにかけ、いまだテロや紛争が頻発している。安定していたGCC諸国でも、カタール断交問題やサウジアラビアでの腐敗摘発といったブラックスワンが顕在化した。

並行して前進の動きもみられる。IS掃討作戦は功を奏し、モスルやラッカが奪還された。イランでは保守穏健派のロウハニ大統領が再選され、対外融和路線に期待が集まる。サウジアラビアでは、「Vision2030」のもと、脱・石油依存を目指した経済構造の変革が始まった。また、女性の自動車運転が許可されるなど、今後の社会構造変革も予見される。

こうした一連の事象は、絹の縦糸と横糸が織りなすペルシャ絨毯のようでもある。立つ位置や光線の角度で織物の色彩や明度が変わって見えるように、折々にこの地域の異なる顔を覗かせる。

変化の中であって、当然変わらないこともある。日本エネルギー経済研究所の「アウトック2018」(レファレンスシナリオ)によると、世界の一次エネルギー消費は2015年の石油換算136

億4700万toeから2050年には197億8900万toeへ1.5倍に増大する。このことは、今後30年余の間に、世界最大のエネルギー消費国である中国が新たにふたつ誕生するのと同じ意味を持つ。この増分を補うエネルギー輸出能力の大半を有するのが中東である以上、世界経済全体にとっての中東の重要度はいささかも変わらない。エネルギーの海外依存度が著しく高い日本にとっても、この地域の動きを見極め、敏感に反応していくことが不可欠だ。

経済同友会中東委員会では、このような中東の重要性を認識しつつ、より幅広い層の企業経営者がこの地域に関心を向け、ビジネスを通じた関係強化にコミットしていくことを促したいと考え、活動に取り組んでいる。会員の意見をみると、「治安・セキュリティ」をリスク要因としてあげる声が多いものの、「若年人口の拡大と市場としての可能性」という魅力には皆が注目を始めている。なかでも、サウジアラビアについては、「Vision2030」のもとで産業多角化や女性の社会進出が進み、それが新しい市場創出につながることへの期待感が高い。

「中東=エネルギー」という思い込みを脱し、現実をしっかりと把握して思い切って現地に飛び込めば、常に最先端を好み、ダイナミックに成長を目指す中東の躍動と旺盛な消費者像がみえてくるはずだ。先入観を捨て、中東の変化の方向性と人々のニーズを適確につかむことが、BtoCなど新たな機会を切り拓く鍵になると思う。